寺田寅彦の「談話」（全集未収録）3 編の紹介

大森 一彦

岩波書店版『寺田寅彦全集』は，初刊(1936-38）以来 全作品のほか，生前未公表の手紙，日記，手帖，その他 いわゆる〈断簡零墨〉をも収めることを編集方針としている．数次にわたる改版の機会に増補改訂され，最終改訂は1999年に完結した30巻本であるが，完成度の高い全集となっている．しかしその後も諸家，諸機関による未収録の新資料の発見報告が断続的にあり，とくに本誌上における四宮義正氏の精力的な調査の成果発表は，寅彦研究のための基盤整備の上で大きな貢献であり，喜ばしいことである．

ところで『全集』第 16 巻(1998）には，9 編の〈談話〉（インタビュー記事）が収められている．これは寅彦の筆によるものではないが，それに準ずるものとして採録されたものであり，読んでみて寅彦の肉声を聞く思いがする．筆者はこれに類するものを，新たに 3 編見出したので紹介する．掲載紙はいずれも讀賣新聞であるが，引用転載にあたり漢字・かなづかいを現代表記に改めるなど，読みやすいように修正した．　■以下に関連情報を註記する．

1.　「研究室より」．讀賣新聞．　1930(昭和 5)年 7 月 27 日．　4 面．

「旅行もいゝけれど，旅館はなにかにつけ不便でしてねえ…どうも僕は宿屋の生活は気に入りませんよ…」．

漱石の門下で歌人で，今は理論物理学というトテツもない浮世離れした研究を，本郷の理化学研究所の一室でつづけている寺田博士，北側の窓を背にして，歌人らしいものやさしさと，学者らしい落付きのうちに，往年の文学青年らしいハニカミを含んで，

「研究所の方にも休暇はあるんですよ．一週間，僕はうちで暮すつもりにしています．もう少し旅行が愉快に出来るといゝんだがなあ」．

むずかしい洋書のうず高く積まれたデスクの片方に，藤田嗣治の滞歐作品展覧会の目録―巴里ジャンヌの裸体を描いた―が貼られてある．博士は火の消えた煙草を指間にもてあそびながら，視線をその横顔にそゝいでいる．博士の胸には，山や海のあの魅惑的な夏の景色と，旅館の不愉快や不便がコンがらかって渦を巻いているだろう．

■この日は日曜日にあたり，4 面は〈文芸 図書 宗教 綜合頁／夏・人・想・行動〉と題する 3 段ぬきの見出しを掲げ，全面 諸家の近況を談話で構成する盛夏の読み物ページとなっている．登場した人物（と小見出し）は，菊池 寛「飛行機で満蒙へ」，島崎藤村「机上の銷夏法」，松岡 譲「未見の牧師」，勝

本清一郎「ベルリン閑話」など 10 人で，そのうちの一人が寅彦である．記者の言葉で，寅彦を歌人としたり，専門を理論物理学とするなど違和感があるが，これが取材した記者の認識であるとすればやむを得ないことだろう．

2. 「地震には必ず発光を伴ふ／従来からの伝説を裏づける武者氏苦心の研究／地震との前後はまだ不明　地震研究所 寺田博士談」．讀賣新聞．　1931(昭和 6)年 7 月 22 日．7 面．

紙面には，寺田の談話に先立って，その人と研究の概要を述べた記事があり，まずそれを掲げる．

〈帝大地震研究所嘱託，目下早稲田中学の地理教師を奉職する武者金吉氏は，古来の地震文献には，洋の東西を問わず大地震に光の現象を伴うと記してあることに非常に興味を持ち，研究していたが，従来地震が多くは昼間発生したためこれを確認するに至らなかったところ，昨年十一月廿六日早暁，伊豆に襲来した大地震は夜分であったため，偶然にもこの現象を観察することが出来た．じらい氏は，まったく寝食を忘れ，寺田寅彦博士指導の下に，伊豆を中心として東京，神奈川，静岡，千葉諸県の中学校その他にわたり照会状を発し，約千五百の報告及びスケッチを蒐集し，実地調査した結果，地震に発光現象が伴うことを確め，光の出現時間，継続時間，発光の状況，色彩，光度その他について，この程詳細な論文を発表し，斯界にセンセーションを起している〉(以下略)．

「武者君は実に篤学者で，この研究も非常に興味あるものと思う．光と地震との関係は古くから問題になっており，安政の江戸大地震，弘化四年善光寺，元禄十六年関東その他，先年イタリーの地震の時もこんな話があったが，何分光の現象があったか否かは，目撃者の視覚によるのみで，証明する事がむずかしい．従ってそれは幻覚だ錯覚だといふ説，あるいは送電線のショートによる発光だという説が非常に有力であるが，武者君の研究は，これによく解答を与えている．しかし発光が地震の先駆をなすものか，地震が原因で，発光現象があったのかの因果関係は判らない．たゞ武者君の功績は，光りという現象が，地震に伴うものだということを明らかにした点にある」．

■この報道のもととなった武者金吉の「詳細な論文」とは，「昭和五年十一月廿六日伊豆地震に伴ひたる光の現象に就て」と題して，「東京帝国大学地震研究所彙報」，Vol. 9, No. 2 (1931. 6. 22) に発表された全 39 ページの論文である．論文発表に先立って，研究所談話会で口頭発表を行う慣わしがあるので，その段階でマスコミが注目したものと推測される．このテーマについては，寺田はかねてより関心を抱き，すでに “On Luminous Phenomena Accompanying Earthquake” と題する 2 編の論文を発表している（論文 no.147,155)．これは *Nature*, Vol. 129, No. 3244(1932. 1. 2) にも紹介されたオリジナルなものである．寺田は武者のこの研究の集大成の出版につくし，『地震に伴ふ発光現象の研究および資料』が 1932 年 12 月に岩波書店から出版された．菊倍判 416 頁もの大冊である．寺田はその書評を 1933 年 3 月 17 日付けの「東京朝日新聞」に書き，武者金吉の功績を讃えた．その文は『物質と

言葉』(鉄塔書院 ⇒ 岩波書店)に収められ，『全集』では第 16 巻にある.

3. 「椿の落下が／地震発生に一つの暗示／関東・豆相大震統計と酷似／風流学者 寺田博士の研究／予知の一助となれば幸い／博士は語る」. 讀賣新聞. 1932(昭和 7)年 6 月 17 日. 7 面.

これも談話に先立って長い解説があるので，まずそれを引用する.

〈「落ちざまに水こぼしけり花椿―芭蕉」. あのしとやかな［花］椿，これはまた殺風景な地震研究の一データとして，東大地震研究所の寺田寅彦博士によって登場させられた. 博士は人も知る吉村冬彦のペンネームをもつ風流科学者であるが，数年前ふとした機会から，庭前の椿の花の落ち方に一つの規則性のあることを発見して，丹念にその統計をとっていたが，昨春から自邸の椿と理研の構内の椿とを材料として，日々の落花数を統計図表に作ったところ，それが意外にも，昭和五年豆相地方に起った地震群の日々の生起数の統計表と同じ型に属しており，さらに関東地震前後における地震の統計表とも酷似している［こ］とがわかった. そこで，落花や地震は，花なり地層なりが成熟しきった時に起る現象であるから，その間に何か共通の物理的法則がはたらいているにちがいないというので，この法則を実験的に暗示する器械模型を作ったが，今春さらに「地震群に就て」と題する英文レポートを作り，全世界の大学 研究所に発表，センセーションを起している〉(以下略).

右について同博士は語る.

「これはほんの道楽仕事にはじめた事で，要するに地震群と形式的に類似した群起的現象が，例えば椿の落下という方面にも現われ，そこに何か一つの物理的法則が暗示されていると感ずるので，それを地震学者の参考にまで発表したのです. 従って到底まだ地震の予知に役立つというようなものでありませんが，この小さな研究が，若い学者のために役立って，もっと立派な研究の一助となれば幸いです」.

■ 7 面のトップに，寺田の近影を掲げた大きな扱いの記事である. 前年(1931)の 7 月 7 日 に，地震研究所談話会において「地震群に就て」を発表しており，本年になって“On Swarm Earthquakes” と題する論文にまとめ発表している(論文 no. 161). これが記者のいう〈英文レポート〉であろう. この論文も，*Nature*, Vol. 130, No. 3270(1932. 7. 2.) に紹介されたことから，研究者間の反響を憶測し，「センセーションを起している」― などと過大に表現したものと思われる. 寺田はのちに「錯覚数題」を書いたとき， この記事にふれ「…ほんのちょっとした論文の内容がどうかすると新聞ではたいした〈世界的〉な研究になったり，ラジオでまで放送されて，当の学者は陰で冷や汗を流すのである. …あたかも〈椿の花の落ち方を見て地震の予知ができる〉と書いてあるかのような錯覚を起こす. …(以下略)」(「中央公論」1933 年 8 月号) と，ジャーナリズムの与える錯覚の妙を指摘している.